

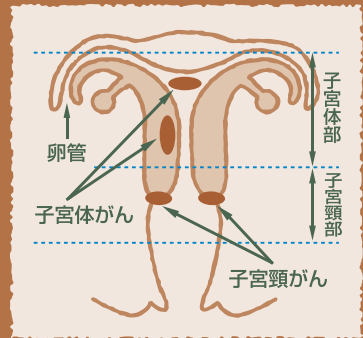
## 子宮がんの現状

子宮がんは女性の部位別がん罹患率（2004年）の中で大腸がん・乳がん・胃がんについて、肺がんとほぼ同じ83%を占めています。

子宮は入り口の部分を頸部、奥の部分を体部と呼び、それぞれの部分を体部と呼び、それぞれのがんを頸がん・体がんと呼びます。日本では昔から頸がんの割合が高く20年前は80—90%を占めていたのですが、最近は欧米化・肥満の増加・晩婚少子化・環境ホルモン等の諸原因により体がんが30%前後にまで増加してきています。一方、頸がんの罹患率は年々減少してきましたが最近下げ止まりとなり、その原因として若年層の罹患率の増加が挙げられます。

### 若い方に増えてきています

子宮頸がんは上皮内がんも含めるとこの20年間において20—24歳で約2倍に、25—30歳で3—4



倍以上増加しています。平成16年より厚労省は子宮頸がん検診について対象年齢を30歳以上から20歳以上に引き下げました。

一般的に頸がんは、異形成（前がん状態）→上皮内がん（0期）→早期がん（I期）→進行がん（II—IV期）と進んでいきます。早期がんの段階で見つかった場合、治療率は80—90%と高いのですが子宮摘出や放射線治療が必要とされ、若年女性の場合は将来妊娠の可能性を失うこととなります。そのため特に若年女性では、子宮を温存した治療が可能な上皮内がんまでに診断することが重要にな

## vol.000 先生おしえて!!

### 子宮がん検診のススメ

産婦人科 丸山 智義



ります。もちろん中高年の方についても早期発見により比較的小さな手術で治療できる可能性が高まることは言うまでもありません。

#### 上皮内がんまでは症状がありません

上皮内がんまでは通常それ自体で不正出血などの症状を起しませんので、子宮がん検診に行くか、または他の理由で婦人科受診したついでに子宮がん検診を行うしか見つかる方法がありません。不正出血があつてから受診して見つかった子宮がんは進行がんであることも少なくありません。

#### 2年に1回では不十分です

同時に厚労省は子宮頸がん検診の受診間隔を1年に1回から2年に1回と延ばしました。しかし、上皮内がんや特殊ながん（腺癌など）では1年に1回でも不十分であるといわれており、

また今まで検診を受けたことがあまりない方についても最初から2年に1回とすると見落としの原因となる可能性があります。将来妊娠を希望されている若年の方や、今まで検診を受けたことがあまりない方は1年に1回の検診をお勧めします。

#### 子宮がん検診は簡単な検査です

ドックや集団検診などで行う子宮がん検診は、一般に頸がんの検診を指します。綿棒またはブラシなどで頸部をこすって細胞診を行う検査で、痛みはほとんどありません。

また内診（場合によっては経膣エコー）もあわせて行ないますので、子宮筋腫や卵巣腫瘍などの婦人科疾患をみつけるきっかけにもなります。

以上のことから、特に今まで受けたことのない方・または不定期にしか受けていない方へ、子宮がん検診をぜひお勧めします。